

リオ・デ・ジャネイロ 1940-42

～亡命ポーランド人とシュテファン・ツヴァイク～

西 成彦

はじめに

私はポーランドの亡命作家、ヴィトルド・ゴンブローヴィチを研究したいという、その一心からポーランド語の学習を始めたのだが、最初に言葉を教わったのが、東大駒場の吉上昭三先生や森安達也先生だったこと、当時、ポーランド文学の研究が許容されたのが、東京大学の比較文学比較文学研究室ぐら이었다ということ、この二つの理由から、「複数言語使用地域の文学」なる、少しは「比較文学」らしいテーマを練り上げて、そこを受験し、何とか合格させてもらった。そのころから、カフカやベケットや、そうした複数言語使用作家、もしくは複数言語使用地域の作家に関心があったから、そうした20世紀文学のなかにゴンブローヴィチを加えて、総合的に「比較文学」しようと考えていたことになる。

しかし、今にして思うのだが、ゴンブローヴィチをはじめとする20世紀（越境と亡命の世紀）の文学を「比較文学」という切り口で勉強することから研究者生活をスタートできたのは、私にとって幸運だった。上に挙げた作家たちは、歴史の大きなうねりのなかを駆けぬけながら、そうした瀬戸際にある生存の環境そのものを描く場合もあれば、敢えてそうした主題を外したところに、もっと寓意性の高い作品を書く場合もあった。しかし、そのどれもが、「国民文学」というような枠には収まりきらず、ジョージ・スタイナーが「エクストラテリトリアルな知性」と名付けることになる、新しい「文学創造」の可能性を切り拓いたのだ。

沼野さんとともにポーランド語を勉強し始めた時代から数えて、はや40年（私は彼の『屋根の上のバイリンガル』と『徹夜の塊・亡命文学論』からどれだけ学ばせてもらったことか！）。この歳月をふり返るにつけ、ゴンブローヴィチ研究から出発した私なりの「比較文学」は、国語と国語といった「境界」によって区切られることから始まる「比較文学」からは大きく遠ざかった。そして、「国語」に変わるものとして私が注目したのは「語圏」だ。「語圏」には、多くの場合「中核部＝本国」があり、「周縁＝植民地や移住先」があるが、現代世界においては、いかなる地域においても、また一人一人の言語脳のなかでも、「語圏」は何重にも重なることがあたりまえになっている。そして、そうした「語圏」のもつれあうなかから、「さしあたりひとつの言語」で文学が書かれる。なぜその作品が「その言語」で書かれなければならないかは、作品自体が明示することもあれば、根拠を示す必要がないと開き直っているようなケースもある。いずれにしても「言語」は

完全に「国語」から遊離して、「語圏」のなか、そして「語圏」と「語圏」のあいだを動きまわるのだ。

そもそもヨーロッパに「国民文学」（ナショナリズムと言ってもいい）が生まれた19世紀、ヨーロッパの諸民族は、それぞれに「民族国家」を有していたわけではない。たまたま絶対主義時代から国家を有していた人々は「国民国家の完成」に向けて躍起になったが、他方、「民族国家」を持たない人々は「民族」なるものの建設プロセスのなかで「ナショナリズム」を高揚させ、その際に「国民文学」に大きな期待がかけられたのだった。ポーランド文学は、まさにその典型例のひとつだった。

いわゆる「ポーランド分割」以降の一世紀以上のあいだに、ポーランド語を「母語」とする人々は、非ポーランド語圏への帰属や、あるいは亡命や移住を余儀なくされた。ポーランドのロマン派が、「国外にあって祖国を想う」というアダム・ミツキューヴィチ（ヤフレデリク・ショパン）のモデルを基本に据えたのだとしても、19世紀以降の「ポジティヴィズム」と呼ばれる時代には、ポーランド語で書いても主題は「愛国」そのものとはかぎらなくなり、それどころか、ポーランド語ではなく、上位の言語（＝征服者の言語）で多くの作品を書いたスタニスワフ・プシビィシェフスキ（彼はベルリンでは表現派のグループとの付き合いが大きかった）や、思想家で言えば、ルージャ・ルクセンブルクなどが生まれた。つまり、かりに「母語」がポーランド語でも、創作には「征服者の言語」や「移住先の公用語」を用いるケースが、ポーランドでは、かなり早い段階から成立していたのだった。そして、この傾向をさらに決定づけたのが、ジョーゼフ・コンラッドであり、彼は書簡以外の文章をポーランド語では残していない。しかし、それでも、「ポーランド文学史」から彼の名前を省くことは不可能だろう。海洋文学に乏しいポーランド文学にとって、コンラッドの作品群は、稀少価値も高く、マリノフスキがメラネシアに興味をもった背景にコンラッド経験があったことは言うまでもない。

つまり、近代日本のように、南北アメリカへの移民を除けば、移住＝入植先においても「内地の言語＝日本語」の強い威信の下に安穏と暮らし、誰もが「国語」にしがみついた場合と、ポーランド人の場合では、たどってきた歴史そのものがかなり違っているのである。

しかし、ポーランド語圏の雑種性（かつての「ポーランド王国」時代の少数民族語や、ユダヤ人のイディッシュ語）に、日本語圏の純粋性を対置してしまうほど愚かなことはないだろう。『外地巡礼』のなかで、私が試みたのは、ある意味、「ポーランド語圏」の幅広さと多様性のモデルを借りた上での「日本語圏文学」のマッピングだった。

そして、こうした構想が私のなかに生まれたのは、1989年にゴンブローヴィチゆかりのアルゼンチンを訪ねた際に知った現地の日系人社会との接触、そして、2002年にサンパウロ大学に招かれた際に知り合った現地の日系人、さらにはポーランド系やドイツ系（ともにユダヤ系を含む）の移民の末裔の方々との接触が欠かせないものだったと今は思う。

日本とポーランドは、巨大な国（かつてのソ連邦）を挟んで隣国同士だとは、かつて使

い古された言い草だが、ブラジルのとくにパラナ州に行くと、ここでは日本人とポーランド人は正真正銘の「隣人」だと、何人もの現地人から念を押された。

以下、ここではブラジルに限定して、ブラジルという「ポルトガル語圏」のなかで、「ドイツ語圏」や「ポーランド語圏」を背負って、ここにやってきた人々の言語経験や、相互の交流について考えるという、これもまた「比較文学」という文学研究の手法を磨くための手がかりをさぐりたい。

1

20世紀の社会学と文化人類学を考えると忘れてはならない二人に、フロリアン・ズナニェツキ（1882-1958）とブロニスワフ・マリノフスキ（1884-1942）がいる。ともにクラクフのヤゲウォ大学出身で、生まれ育ったころ、ポーランドという国はなかったが、二人ともポーランド人だ。

ズナニェツキは、米国に渡り、ウィリアム・アイザック・トーマス（1863-1947）との共著『ヨーロッパとアメリカのポーランド農民』*The Polish Peasant in Europe and America, Monograph of an Immigrant Group*（1918-20）でシカゴ学派の移民研究の金字塔を築き、マリノフスキは英国を拠点にして、トロブリアンドでの調査をもとにした『西太平洋の遠洋航海者』*Argonauts of the Western Pacific*（1922）で、「参与観察」に基づく民族誌の模範例を示し、さらに死後に刊行された『日記』*A Diary in the Strict Sense of the Term*（英訳版、1967）／*Dziennik w ścisłym znaczeniu tego wyrazu*,（ポーランド語版オリジナル、2002）は、オートエスノグラフィーの古典になっている。

二人は、ポーランドの再独立後も、帰国はせず、主要な著作は英語で残しているが、ズナニェツキの場合には、ポーランドの国民作家（ノーベル賞作家でもある）、ヘンリク・シェンキューヴィチ（1846-1916）が若い頃に残したルポルタージュ『アメリカからの手紙』*Listy z podróży do Ameryki*（1880）から少なからぬ影響を受けたはずだし、マリノフスキがコンラッドの愛読者であったことは上に記した通りだ。

そして、こうした海外でのポーランド系学者の活躍が、1918年以降の再独立ポーランドの諸学問や文学にも大きな影響を与えることになる。とりわけ海外の同胞（Polonia）の消息に対する関心は、国民の間でも高まり、それどころか、再独立後のポーランドは、旧ロシア領からの引揚者の引き受けなどで、人口増に悩まされ、新生ポーランド外務省は、アメリカ諸国に新規移民の受け入れを要請したほどだった（1924年以降の米国の移民制限が、南米地域への移民の急増をもたらした）。

両大戦間期に若手を代表する一人として台頭したズビグニェフ・ウニウォフスキ（1909-37）が、外務省の奨学金を獲得して、ブラジルでもとくにポーランド系移民の多かったパラナ州に向かったのも、同じころ、ルポルタージュ作家として高い名声を挙げていたアルカーディ・フィードレル（1894-1985）が、当時、ユダヤ人ポーランド人の仮想入植地として話題に上っているのを見越すかのようにマダガスカルを旅行して『マダガスカル』

Madagaskar (1937) を書いたのと軌を一にしていた。

そもそも、デビュー作の『雑居部屋』 *Wspólny pokój* (1932) から底辺の暮らしを露悪的に描く傾向にあった彼は、ブラジル社会に同化もできず、かといってポーランド時代に身につけた素養をもかなぐり捨てて、現地では「カボクロ」 *caboclo* の名で貶められる「西洋人でありながら先住民と見まがうような生活に甘んじる半未開人」へと墮落の一步をたどっている同胞の姿を、ぶっきらぼうな文体で書き上げ、派遣した側の期待を無残にも裏切った。

しかし、『ポーランド文学史』 *The History of Polish Literature* (1969/83) のチェスワフ・ミウォシュの命名によれば「社会派ドキュメンタリー」 *social document* (p. 702) に相当する、「生活史」的なルポルタージュの蓄積があつてこそ、第二次大戦後の人民共和国においてもまた、「ポローニャ研究」が定着しえた。

世界の各地に散らばったポーランド系移民から作文を募って、『移民たちの手記』 *Pamiętnik Emigrantów* (1960) を編むような試みがなされたのも、なんと、ナチス・ドイツの駐留時代に、19世紀末のポーランド移民が、移住の途上、そして定着先から郷里に書き送った（しかもそのままロシアの官憲による検閲によって配達されないまま訳書に眠っていた）ものが発見されて、それが『移民書簡』 *Listy Emigrantów z Brazylii i Stanów Zjednoczonych* (1973) として刊行されたのも、人民共和国時代だった。

ウニウォフスキは、ブラジル紀行に相当する『密林のライ麦』 *Żyto w Dżungli* (1936) を仕上げたあと、ワルシャワのスラムでの少年時代を描いた『人生の二十年』 *Dwadzieścia Lat Życia* (第1巻1937) を半ばまで書いたところで、あっけなく亡くなるが、たとえばゴンブローヴィチが、ブルーノ・シュルツ (1892-1942) と並んで、強いライバル意識を燃やしていたのが、このウニウォフスキだった。

2

しかし、両大戦間期におけるポーランドの南米熱、とりわけブラジル熱には、もうひとつの流れがあった。

それこそ19世紀の前半から、すでに多くの移民を南北アメリカに送り出していたドイツ諸邦においては、ゲーテ (1749-1832) の「国をしるやかなたへ」 *Kenst du das Land? wo die Citronen blühen* に代表的に示されるような南方憧憬があつたことは、トーマス・マンの母親のユリア・ダ・シルヴァ・ブリュン (1851-1923) がブラジルのパラチー (リオ・デ・ジャネイロ州) 生れであることに注目した『母の国』 *Mutterland – Die Familien de Mann und Brasilien* (2009) という本格的な研究書の共著者の一人であるパラナ連邦大学のパウロ・ゼーテ教授もまた指摘しておられるところだ。

レモンの木は花さきくらき林の中に

こがね色したる柑子【かうじ】は枝もたわゝにみのり

青く晴れし空よりしづやかに風吹き
ミルテの木はしづかにラウレルの木は高く
くもにそびえて立てる国をしるやかなたへ
君と共にゆかまし（森林太郎・訳）

若き日のゲーテ（1749-1832）が高らかに歌い上げた、こうした南方憧憬が、19世紀に入ってからドイツ系海運業の発達や、19世紀半ば以降、ドイツから一気に東へと延伸していった鉄道網の拡大に伴って、東方の地へ及ぶようになる。ポーランド語の「ブラジル熱」gorączka brazylijskaは、ドイツ領のみならず、オーストリア領やロシア領の広域へと広がったのだ。

そして、ポーランド文学のなかで、ブラジルが「あこがれの国」として歌われた例としては、アントニ・スウォニムスキ（1895-1976）の『遠き旅から』*Z Dalekiej Podróży*（1926）が有名だ。新天地に移り住んでからも「文明化」の恩恵に浴することがないまま、ブラジルの奥地に定着していった「密林のライ麦」たちの悲哀とは異なる形で、当時はまだブラジルの首都であったリオ・デ・ジャネイロが、他方で「亡命ポーランド人」の避難先として脚光を浴びることになるのである。

第二次大戦勃発当時のブラジルは、ヴァルガス大統領の国民統合政策の一環で、ポルトガル語以外の出版は禁止されており、後には敵国となる枢軸国（ドイツ・イタリア・日本）系移民の活動ばかりでなく、ポーランド語を使った出版活動も禁止された状態であった。ロンドンやニューヨークと比べれば、かならずしも文化的な自由が保証されていたわけではなかった。しかし、ブラジルPENクラブの心遣いもあったのだろう、ユリアン・トゥヴィム（1894-1953）と妻ステファニア（1894-1991）ら、戦争を逃れてリオを訪れたポーランド人（トゥヴィム夫妻はユダヤ系だったが、ポーランドからの避難民はそればかりとはかぎらなかった）にとって、コルコヴァードの像やボン・ヂ・アスカルの姿は、ある種の安心感を約束するものだった。

そして、トゥヴィムは、かつてロマン派詩人、アダム・ミツキェーヴィチ（1798-1855）が、パリのアパートで長編叙事詩『パン・タデウシュ』*Pan Tadeusz*（1834）を書き、同胞たちの前で読み上げたように、同じく長篇の『ポーランドの花々』*Kwiaty Polskie*に着手し（冒頭部分はロンドンの『文学時報』*Wiadomości Literackie*に発表された）、これは、戦後に帰国した後も、晩年まで手が加えられ、まさにトゥヴィムのライフワークとも言うべき大作となる。

今日はリオもポーランドがごとき雨模様
ポーランドがごとき雨雲が空をおおう
船の幻、船の影が海を越え
今日、ウッチの町がリオへと上陸

毎度のことながら、雨が降ると
 外を歩きたくなる… アヴェニーダじゃなく
 クルトカ街からナヴロトまで*
 百度歩いて、百度引き返すのだ（拙訳）

* クルトカ街は、ウッチのユダヤ人居住地区で、後にゲッターの一部となる。ナヴロトは、西（ザホドニャ）通りを南下すれば交差する市内中心部の大通り。

トゥヴィムの死後 60 年目にあつた 2013 年には、ポーランド大使館が中心になって、朗読付きのオーディオブック『トゥヴィム』 *Tuwim* が編まれ、トゥヴィムは、ブラジルにとって最もゆかりのある詩人となった。

3

ところで、第二次世界大戦勃発後のブラジルと言え、ポーランドとの直接の縁はないが、当時を考えるとときに忘れてはならない作家に、シュテファン・ツヴァイク（1881-1942）がいる。若い時代を過ごしたハプスブルク帝国の自由な空気を愛し、それこそ「ひとつのヨーロッパ」を夢見ながら、数々の伝記小説は、多くの言語に訳されて、その名声は新大陸にもまた轟いていた。両大戦間期は、オーストリア国籍を持ったまま、しだいに反ユダヤ主義が強まり始めた 1930 年代半ばには、英国に拠点を移し、「愛するヨーロッパ」が「昨日の世界」 *die Welt von Gestern* へと転落していくさまにうちふるえながら、鬱々とした日々を送るようになっていた。

そんな彼が、1936 年の 9 月には、南米ブエノスアイレスで開かれた国際 PEN クラブ大会（国際 PEN クラブの結成は 1922 年で、場所はロンドンだった）と、それに引き続いて開催された知的協力国際委員会（後の UNESCO の前身で、1924 年、パリに結成された）のブエノスアイレス大会に参加するのに先駆けて、リオ・デ・ジャネイロを訪問して大歓迎を受けている。おもに接待係を引き受けたのは、ツヴァイク（やフロイト）のブラジルへの紹介者であったアブラアン・コーガン（1912-2000、ロシア領ベッサラビア生れのユダヤ系で、8 歳のときに渡伯）だったようだが、ツヴァイクは現地の《ユダヤ救護協会の「避難民のための非公開集会」において〔中略〕朗読し》たり、《六千ミルレイスを超える金額を〔中略〕寄付》（p. 542）したりなどしたと『日記』にはある。また、リオで、いっしょに《売春街をぶらつき、《東方からやってきたユダヤ女》が《とんでもない変態行為を約束している》》（pp. 535-6）さまを覗かせてくれたのもコーガンだったようだ。このときのツヴァイクは単身だったからアヴァンチュールがあつたのかもしれない。

他方、同じく『日記』によれば、1935 年のニューヨーク時代に、彼は、ショレム・アッシュ（1880-1957）ほか、現地のイディッシュ作家たちとも知り合っている。それこそ《ユダヤ系の文学や演劇の関係者のいるカフェ・ロイヤルに〔中略〕身を置いたとき突然

ワルシャワやレオポルトシュタット【ウィーンの東欧ユダヤ人居住地区】に居合わせたような気分になった》(p. 508) というぐらいだから、リオ（また後のブエノスアイレス）でも、いわゆるドイツ人より、むしろイディッシュ語を共有する東欧ユダヤ人との前にずっと行き来があったことだろう。戦後にブラジルのイディッシュ文学世界を背負って立つことになるロザ・パルトニク（1904-81）やメイル・クチンスキ（1904-76）らが、反共主義と人種主義の昂揚から逃れるようにして、ポーランドからブラジルにたどり着いたのも、ちょうどこのころだった。

いよいよ第二次大戦が勃発し、英国やフランスでさえもが安全ではなくなった1940年、ツヴァイクは、今度は若い妻のロッテとともに、ふたたびリオを訪れ、近郊のペトロポリスに屋敷を借りて、それこそ『未来の国ブラジル』*Brasilien. Ein Land der Zukunft*; (1941) を書き上げてまで、「昨日の世界」でしかないヨーロッパに対する「ブラジルの希望的側面」を強調したのだった。同書は、ストックホルムで出たドイツ語版がオリジナルだが、ほぼ同時に、英語版、スウェーデン語版、フランス語版、ポルトガル語版（ポルトガルとブラジルで二種類）が刊行され、すでにブラジルにもその噂は広まっていた。

1936年8月の最初の南米旅行から始めて、1942年2月23日早朝の死に至る（遺書は22日付）までを扱った『シュテファン・ツヴァイク／さようならヨーロッパ』*Stefan Zweig, Farewell to Europe* (2016、マリア・シュラーダー監督作品) は、このあたりを丹念に描いている。ドイツ語やフランス語や英語に加えて、スペイン語やポルトガル語が飛び交う多言語映画になっているところが、何といても特徴的だし、ブエノスアイレスのPENクラブ会議の会場で、おそらくアッシュから紹介されたことがあるのであろうハルペルン・レイヴィク（1888-1962）と、すれ違いざまに挨拶を交わすシーンがこっそりさしはさまれているなど、芸が細かい。また、ペトロポリス時代の場面では、当時、ブラジルのチリ大使館に外交官として勤務していたガブリエラ・ミストラル（1889-1957）のことが話題にのぼり、彼女は映画の最後で、ツヴァイク夫妻の弔間に姿をあらわす。

映画を観るかぎり、ペトロポリスでツヴァイクが親しくしたのは、身元引受人のコーガンを除けば、ドイツ語話者でも、ユダヤ系を中心とする「ドイツからの亡命者」が多かったようだが、少なくとも（要するに、1942年8月22日の断交前）のヴァルガス政権は、外国人に対する警戒を強めていただけでなく、親ナチ的な傾向があった可能性がある。ツヴァイクのペトロポリスでの生活は、ある種の軟禁状態であったと言っても言い過ぎではなかっただろう。

4

じつは、このツヴァイクの晩年に関して、上記の映画には気配を示すこともないが、ポーランド出身の作家、ミハウ・ホロマインスキ（1904-72）と、舞踊家の妻、ルツ・アブラモヴィチ・ソレル（1907-74）が、彼らならではの印象を書き残している。

ホロマインスキは、「ポーランド分割」の末期、ロシア領ウクライナのエリザヴェトグ

ラード（現在のクロピウヌーツイキイ）に生まれ、1924年に、「引揚げ」を経験したポーランド人で、その後はポーランドの作家や作曲家らと親しく付き合っており、『嫉妬と医術』*Zazdrość i Medycyna*（1932）で華々しくデビューを飾った。しかも旅行好きだった彼は、1930年代に南米やアフリカを旅行するなど、破天荒な経歴の持ち主だったが、第二次大戦の勃発前夜にユダヤ系の舞踊家、ルツと結婚したばかりであったこともあって、ポーランドを離れる道を選び、1940年の9月15日にブラジルにやってきたようである（トゥヴィム夫妻は同年8月5日と一足早かった）。

そして、ホロマインスキ夫妻の手記には、もちろん、リオの亡命ポーランド人社会に関する記事もある（湾をはさんだニテロイに集住地があったようだ）にはあるが、リオに旅の荷を下ろしたばかりの彼らの前にいきなり姿を現したツヴァイク夫妻に関する回想が印象的だ。

じつは、ツヴァイク夫妻のリオ・デ・ジャネイロ着は、同年8月22日だったとのことだが、上にも書いたように、ブラジルはドイツの国交を破ってはいなかったから、リオ周辺には、ゲシュタポも含めた、ナチ党員が少なくなかったはずで、ツヴァイクがいくらブラジルを「礼賛」しようと、そうした「衆人環視」の被害者意識からは自由ではなかっただろう。

同じ感覚は、ホロマインスキ夫妻、とくにユダヤ系のルツもまた共有するところであったに違いなく、ツヴァイク夫人の「死」を聞き及んだ二人は、それが自殺＝心中ではなく、ゲシュタポの陰謀であったかもしれないという疑念にとりつかれたという。つまり、ツヴァイクの陥っていたかもしれない「迫害恐怖」のようなものを最も理解していた隣人は、ホロマインスキ夫妻であったかもしれないのである。

ホロマインスキと妻ルツは、その後、サンパウロ経由でパラナ州のクリチバに移り住んだ後、最後はカナダに移住し、モントリオールでは、ルツがバレエ学校を運営して食いつないだのだという。ポーランドに帰国するのは、1957年のことであったが、長いブラジルを経て、ふたたび小説の量産体制に入ったホロマインスキは、自分たちもまたツヴァイク夫妻と同じく秘密警察（この場合は、ブラジルの政治警察）による監視に脅えなければならなかった時代を、『マクンバ／口を利く木』*Makumba, czyli drzewo gadające*（1968）のなかでコミカルに（しかも、人民共和国の監視体制をも匂わせる形で）ふり返ることになる。

5

第二次世界大戦期、各「語圏文学」の広がりや、兵士の進撃や亡命者や難民の流出にともなって、それまで誰も想像しえなかったほどの大きさへののぼりつめた。

ここでは両大戦間期のポーランド文学を背負った作家たちの南米体験（亡命体験を含む）と、ドイツ語作家の一人、シュテファン・ツヴァイクのそれを並べてみた。しかし、そうした場合にも、ツヴァイクの孤独には、量り知れないものがあったように思う。

1936年のPENクラブ世界大会に、オーストリアを代表して招待されたものの（その頃はロンドン在住だった）、ドイツ語で心置きなく話せる相手は、オーストリアの代表であったラウル・アウエルンハイマー（1876-1948、テオドル・ヘルツルの甥にあたるユダヤ系）と、あとはエミール・ルードヴィッヒ（1881-1948、本名は、エミール・コーンで、ブレスラウ生まれのユダヤ系で、会議には「ドイツ語作家集団」Group of Germanic Writersを代表して参加。当時はスイス在住）ぐらいだった。

そして、次に、1940年から42年にかけてのリオ・デ・ジャネイロ周辺は、さまざまな言葉話すヨーロッパ人が渾然と暮らす「無国籍的」な文化空間だった。映画『ツヴァイク』のなかで、ツヴァイクと、その受け入れ人のコーガンは、フランス語で話していたし、ホロマインスキ夫妻との会話もフランス語であったと思われる。

第二次世界大戦が、「各国文学」なるものの自明性を木端微塵に打ち砕いたことは知られる通りだが、たとえばニューヨークがそうであったほどではないとしても、リオ・デ・ジャネイロにおいても、ドイツ・東欧系の亡命者の横のつながりは、「世界文学」の歴史に、不可逆的な変化をもたらしたと考えていいと思う。

こうしたことは、これまでブラジルにおいても、あまり重視されてこなかったが、東欧ユダヤ系移民二世のモアシル・スクリヤール（1937-2011）が、第二次大戦当時のポルト・アレグレにおけるドイツ系ブラジル人と東欧ユダヤ系ブラジル人の対決をユーモラスに描いた『ボンフィン戦争』*A Guerra do Bom Fim*（1972）を書くなど、少しずつ「多文化主義的なブラジル」をテーマに据える作品は増えてきつつある。「多言語性」をぬきにした「アメリカ文学論」など、あってはならない。おそらく、この点については沼野さんからも同意が得られるだろう。

参考文献

- Fernando Baukat (org.), *Independente! Um palco alemão em Curitiba*, Quadrinhofilia, Curitiba, 2013
- Michał Choromański, *Makumba, czyli drzewo gadające*, Wydawnictwo Poznańskie, Poznań, 1968
- Michał Choromański, *Memuary*, Wydawnictwo Poznańskie, Poznań, 1976
- Comision Argentina de Cooperacion Intelectual, *Europa, America Latina*, Institut International de Coopération Intellectuelle, Buenos Aires, 1937
- Karl-Josef Kuschel, Frido Mann, Paulo Soethe, *Mutterland: die Familie Mann und Brasilien*, Artemis & Winkler Verlag, Mannheim, 2009
- P.E.N. Club of Buenos Aires, *XIV International Congress of the P.E.N. Clubs, September 5 to 15, 1936*, tr. from the Spanish Edition by Arturo Orzábal Quintana, Buenos Aires, 1937
- Moacyr Scliar, *A guerra do Bom Fim*, Expressão e Cultura, Rio de Janeiro, 1972

リオ・デ・ジャネイロ 1940-42 ～亡命ポーランド人とシュテファン・ツヴァイク～

- Marek Sołtysik, *Świadomość to Kamień, Kartki z życia Michała Choromańskiego*, Wydawnictwo Poznańskie, Poznań, 1989
- Tatiane Trovatti, *Julian Tuwim*, Babel Studio, Embaixada da República da Polónia em Brasília, 2013
- Stefan Zweig, *Brasilien. Ein Land der Zukunft*; Bermann-Fischer, Stockholm, 1941
- Stefan Zweig, *Die Welt von Gestern*; Bermann-Fischer, Stockholm, 1942
- チェスワフ・ミウオシュ『ポーランド文学史』関口時正／西成彦／沼野充義／長谷見一雄／森安達也訳、未知谷、2006
- 西成彦『移動文学論Ⅱエクストラテリトリアル』作品社、2008
- 沼野恭子「シェンキェヴィチのアメリカ」、『比較文学研究』61号、東大比較文学会、1992
- 関口時正「プロニスワフ・マリノフスキの日記をめぐって」、『西スラヴ学論集・創刊号』西スラヴ学研究会、1986（以下に再録：関口時正著『ポーランドと他者——文化・レトリック・地図』みすず書房、2014）
- W・I・トーマス、F・ズナニエツキ『生活史の社会学』桜井厚訳、御茶の水書房、1983
- シュテファン・ツヴァイク『ツヴァイク日記』クヌート・ベック編、藤原和夫訳、東洋出版、2012